

変化と進化

Change and Evolution



取締役 執行役員 経営・管理担当兼経営企画室長

兵 頭 道 明

Michiaki Hyodoh

Director and Executive Officer

Corporate Strategy Department

さまざまな文化やテクノロジーに囲まれた私たちの生活様式が、将来的にはどのようなようになっていくのか。そんなことを時折、生物の進化に重ね合わせて考えてみるがあります。

生物の進化には、あらかじめ定められた方向性はないと言われています。

突然変異が偶然、その環境変化に適応したのか、あるいは環境変化に適応するように突然変異が起こったのか、専門的なことは分かりませんが、いずれにしても結果として周囲の環境にうまく溶け込み、自らの形を変えることにより生き延びてきたもので、それを進化と呼んでいる訳です。

鳥の祖先は恐竜の一種とのことですが、これも体温を守るための羽毛がいずれ翼へと形を変え、その翼がたまたま飛行するのに都合よく機能した、という説があります。太古の恐竜が、いつかは空を羽ばたきたい、という強い想いが鳥類へと形を変えていったものではなさそうです。

確かに、進化に一定の方向性があるとすれば、すべての生物は同じ形を目指していくことになりますが、現実はそのではなく、むしろ多様化の道を歩んできた訳です。

それでは私たちの生活様式はどうでしょうか。果たしてあらかじめ定まった方向性、すなわち最適といえる方向に向かい進化しているのでしょうか。あるいは、その時々々の環境変化に適応するという行為の積み重ねなのでしょう。

生物の進化と同様、やはり定まった方向性があるとは考えにくく、環境変化による進化と考えるのが妥当でしょう。

そうだとすれば、それはどのような環境変化に伴うものなのでしょうか。

たとえば「通信」というテクノロジーに目を向けると、かつては狼煙（のろし）や太鼓の響きが使われていました。近代になり、モールスが電信機を発明してからおよそ170年、現在では改めて表現するまでもなく、高速、大容量、小電力、ユビキタス（いつでも、どこでも、だれでも）の道をまい進しています。

ここに至るまでの進化は、気候や地殻変動という自然環境の変化によるものでないことは明らかです。領地や国土、そして組織を拡大させるにつれ、より高度な通信手段が求められてきたからでしょう。

すなわち、自らが創り出した社会的環境の変化に対応するための必要性や欲求が後押しをしてきた結果と言えます。他の多くのテクノロジーも同じではないでしょうか。

今日の日本に目を向けてみます。

原子力発電所の事故以来、日本の社会には大きな環境と意識の変化が起こっています。

放射線物質の汚染による食品に対する意識の変化、電力不足に対応するための就業形態や生活様式の変化など、5年後、10年後、そして20年後に振り返ったとき、2011年がまさに「生活進化の方向性」に変化が生じた年として思い起こされることになるのではないのでしょうか。その段階では、自らが創り出した社会的環境の変化に対応するため、新たな生活様式やテクノロジーが出現しているはずですが。

それではまだ見通すことのできない将来の社会に、私たちはどのような貢献ができるのでしょうか。そして、それをどのようなビジネスにむすびつけることができるのでしょうか。

そのキーワードは、「現在の延長線上から、離れて見る」ということかも知れません。これは個人的にも会社としても大事な視点であると思います。

今起こりつつある環境変化を把握し、その先の社会のありようを予測し、かつ、その予測の中から普通ではないものをピックアップする。すなわち、多くの人が思いもつかない結論に到達する、という思考回路が新しいものを創出していくことになり、さらには新しいビジネスにつながっていくのではないのでしょうか。

これは言うほど簡単なものではありませんし、この成功確率は決して高いものとは言えないでしょう。

しかしながら、会社を支える柱となる複数のビックビジネスを獲得するためには、生物の進化における「突然変異」こそ、今、求められる変化ではないかと思います。それがまた、夢を呼んでくれることもあるでしょう。

現在、当社では中堅社員を中心に、自由な発想の下で会社の将来像を描く活動を進めてきています。こうした議論の中から、「突然変異」が生まれ出ることを期待しています。